



文化財愛護
シンボルマーク

北条町埋蔵文化財報告書18

Hōjō
鳥取県東伯郡北条町



Magari

曲古墳群発掘調査報告書第2集

曲226号墳

1995. 3

北条町教育委員会

Hōjō
鳥取県東伯郡北条町

Magari
曲古墳群発掘調査報告書第2集
曲226号墳

1995.3

北条町教育委員会

序 文

北条町は倉吉とともに、県下有数の古墳分布を形成し、特に270基以上の古墳を数える土下古墳群、225基以上を数える曲古墳群など、古墳密集度は県下一と言われています。なかでも、大将塚と呼称される土下236号墳は径40m、高さ5mを測り、円墳としては県下最大級と言われています。また、土下213号墳（やすみ塚）の北に隣接する円墳の封土からは可憐な「鹿」の埴輪や人物、家形埴輪も出土しています。

ここに報告する曲226号墳は、県営北条西地区農免農道整備事業の事前調査として、北条町が平成5年度に実施した発掘調査の記録を平成6年度に整理作成した報告書であります。

今回、調査いたしました曲226号墳は、曲古墳群の中でも、南東端の倉吉市と本町の町境に位置する古墳時代後期の円墳です。横穴式石室を埋葬主体としていたもので、古墳そのものの遺存状態は近世の開墾などにより破壊され、良くありませんでしたが、横穴式石室の構造の一部や出土遺物から、当時の古墳形態の一端をうかがい知ることができました。

残念ながら、遺跡は記録を残すだけとなりましたが、これら記録や掘り出された出土品が整理され貴重な文化財として私達郷土の歴史を知り、愛する一助となれば幸甚と存じます。

なお、調査に際しては、土地所有者・島地区の皆様にも一方ならずご理解とご協力を頂くとともに、県教育委員会文化課・県埋蔵文化財センターをはじめとする関係各機関、各位のご指導、ご助言を賜りました。心から感謝し厚くお礼申し上げます。

平成7年3月

北条町教育委員会

教育長 井 上 浩

目 次

序文

例言

目次

挿図目次、挿表目次、図版目次

第1章 調査に至る経緯	1
第2章 位置と環境	1
第3章 調査の結果	5
第4章 まとめ	10

挿 図 目 次

挿図1 曲226号墳位置図	1
挿図2 北条町遺跡分布図	3
挿図3 調査前地形測量図	5
挿図4 曲226号墳墳丘図	6
挿図5 主体部実測図	7
挿図6 出土土器実測図	8

挿 表 目 次

挿表1 北条町内遺跡一覧表	3
挿表2 出土遺物観察表	9

図 版 目 次

図版1 調査区遠景、主体部
図版2 主体部
図版3 出土遺物

例 言

1. 本報告書は、平成5年度と6年度に、鳥取県倉吉地方農林振興局地域整備課の委託を受けて、北条町教育委員会が主体となって実施した北条町曲字割木谷地区に所在する曲226号墳の埋蔵文化財発掘調査記録である。
2. 調査体制は以下の通りである。
 - 調査団長 井上 浩（北条町教育委員会教育長）
 - 調査指導 長岡充展（鳥取県埋蔵文化財センター）
 - 調査員 松本達之、宇田川 宏、西村勝義、日置桑左エ門、前田明範（以上、北条町文化財保護委員）、宇田川彰二（北条町教育委員会主事）
友定美保子
 - 事務担当 宇田川彰二
樋口 和夫（北条町教育委員会教育課社会教育係係長兼社会教育主事）
 - 調査協力 松本 哲・井上三千代・川本美佐子・福田寛子
3. 本書の執筆、編集は樋口が行った。
4. 遺構の実測、図面作成、写真撮影は調査員及び中原由香里、福田香織が、遺物の実測・遺構図、土器の浄書は松本・井上・川本・福田が行なった。
5. 本書に使用した方位は全て磁北を示す。
6. 図面、写真、出土遺物等は北条町教育委員会が保管している。

第1章 調査に至る経緯

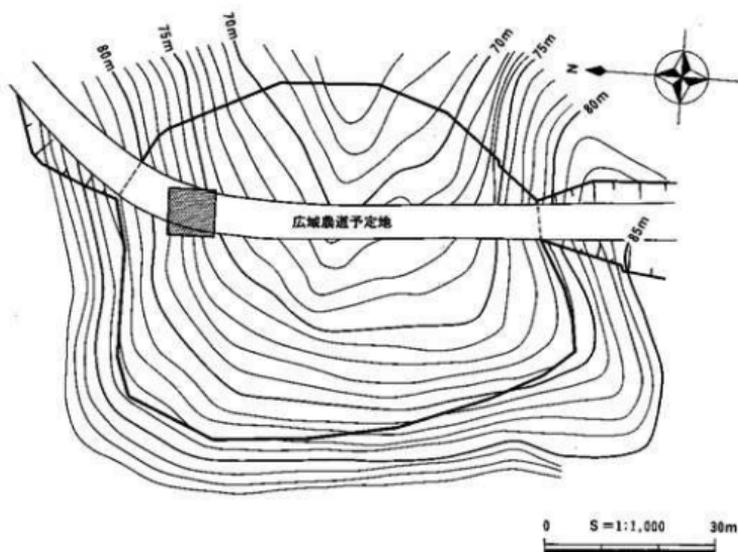
平成5～6年度県営北条西部地区農免農道整備事業は曲古墳群が所在する丘陵部に計画された。これにより、曲226号墳が所在する丘陵先端部について調査する必要が生じたため、北条町教育委員会は県教育委員会文化課、県埋蔵文化財センターと協議した結果、計画地の古墳全域について、事前に発掘調査を行い記録保存することにした。

調査期間は平成6年1月11日から3月25日と7月1日から平成7年3月24日の間である。

第2章 位置と環境

北条町 県の中央部に位置し、町域は県下第3の河川、天神川の左岸を占め、北部は海岸砂丘、中央部は沖積低地が広がり、南部山地は大火山砕屑岩類を安山岩からなる丘陵性山地である。東は天神川を隔てて羽合町、西は大栄町、南は倉吉市に接し、北は日本海に面している。面積は20.99km²と小さな町であり、当町は、町域の中央をJR山陰本線と県道羽合・東伯線（旧国道9号）が、さらに、国道9号線は海岸砂丘を東西に、ほぼ並行して走っている。

曲226号墳 曲226号墳は町の南西部、倉吉市との町境に近い標高77m前後の丘陵先端部に位置する。所在地は北条町曲地内で、地番は北条町曲字割木谷1265—9番地である。



挿図1 曲226号墳位置図

歴史的環境 縄文時代前期になると台地上から遺跡が低湿地へ移動しており、爪形文や刺突文土器が島遺跡（17）から出土している。中期、後晩期も低湿地の遺跡が継続して営まれており、島遺跡の他に、船渡遺跡（18）、天神川河床遺跡（7）などが見られる。

町内の弥生時代の様相は明確ではないが、曲第1遺跡（1）、北尾遺跡（16）、島遺跡などで弥生土器が出土している。

また、米里の通称「蔵合屋」と呼ばれる畑地からは、弥生土器の壺と共に、袈裟禪文の銅鐸が発見され、祭器の出土にこの地域の高度な弥生文化の一端を知ることができる。

町内の古墳時代の墓制を窺うと、前期前半には径20mの円墳、曲148号墳など箱式石棺を中心とした古墳が築造されはじめ、中期に入っても、20m以上の方墳、土下129号墳などに箱式石棺墓が継続されている。

後期には小型の前方後円墳や大型の円墳を中心として、曲古墳群（1）、土下古墳群（2）、茶臼山古墳群（4）、北尾古墳群（5）といった群集墳が盛んに築造され、県下有数の古墳分布を形成しており、当地域が倉吉と共に伯耆の中心であったことがうかがえる。

特に、全長33mを測る前方後円墳、土下213号墳（通称「やすみ塚」）の周辺からは、鹿埴輪の他に、人物埴輪、家型埴輪など。最近の調査で土下210号墳からは、全国でも希有な「鹿の子文」をもつ人物埴輪、帽子をかぶっていると考えられる人物埴輪、「斜格子文」をもつ人物埴輪が出土し、当古墳群が高度な後期古墳文化のもとに形成されたことを示している。

古墳時代の集落は曲第1遺跡（岡遺跡）にみられ、山裾部や平野部に営まれている。その他、中世に至るまで、著名な遺跡は枚挙に暇がないほどである。



挿図2 北条町遺跡分布図

A. 曲226号墳	1. 曲古墳群	2. 土下古墳群
3. やすみ塚(土下213号墳)	4. 茶白山古墳群	5. 北尾古墳群
6. 鳥古墳群	7. 天神川河床遺跡	8. 字ノ塚遺跡
9. 殿屋敷遺跡	10. 馬場遺跡	11. 長畑遺跡
12. 用露鼻遺跡	13. 茶白山要害	14. 中浜遺跡
15. 下神1号墳	16. 北尾遺跡	17. 鳥遺跡
18. 船渡遺跡	19. 米里第1遺跡	20. 米里第2遺跡
21. 天王山遺跡	22. 曲第1遺跡(阿遺跡)	

挿表1 北条町内遺跡一覧表

第3章 調査の結果

立地墳丘 丘陵裾部南側に立地し、墳丘の南側はやや急斜面となっている。

調査前の墳丘の規模は斜面部に立地することもあって不明であった。調査した曲226号墳は破壊をうけ、石室は大きく露出しており、封上の流出も大きかった。墳丘検出時の規模は長径（東西長）約11.5m、短径（南北長）約8.5mを測り、平面楕円形墳と推定される。高さは周溝底から最大40cmを残すのみである。

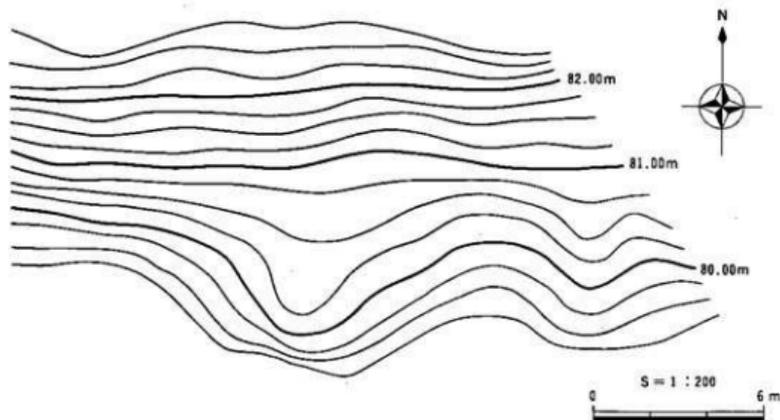
周溝 周溝は開口部を除き、墳丘南側から東側にかけて最大幅1.1m、深さ0.4mを測る断面逆台形のを巡らせている。

主体部 本古墳の主体部である横穴式石室は、墳丘のほぼ中央に位置している。石室の上部は封土流失のため大きく露出しており、天井石は全てずらされ、開口している。残存部より玄室の規模は2.6m×2.3mのやや長方形を呈すと思われる。内部は側石下位から約30cmの厚さで茶褐色腐植土が堆積し、板石の破片が多数散乱していた。なお、玄門部、羨道部とも攪乱され不明である。

石室の主軸はN-16°-Eをとる。

天井石 天井石は長辺3~4mを測る大きな平石が3枚使用されているが、いずれも動かされており、原位置は断定できないが、その大きさからみて、玄室上部をほぼ覆っていたものと推定される。

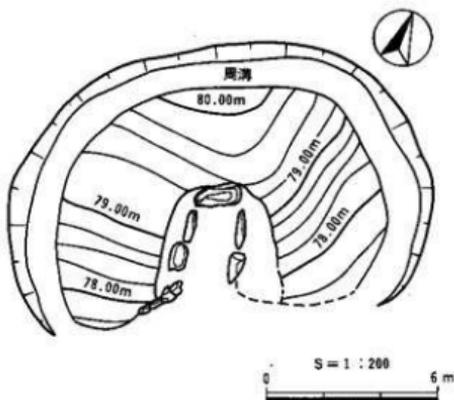
側壁及び奥壁 側壁は左右とも土圧のため、やや内傾したり、移動したりしているが、もともと、玄室は左右の側石が奥壁をはさむ形で造られたものであろう。側壁の築成をみると、奥壁左側上位に数枚の小さな板石（へぎ石）が残存することと、玄室内に落ち込んだ多数の小型の板石から、1枚の板石や転石と若干の小口積みを基本として



挿図3 調査前地形測量図

積み上げたものと思われる。奥壁は高さ約2m、幅1.8m、厚さ0.8mの大きな転石1枚で造られており、ほぼ垂直に立ち上がる。

なお、羨道部左側には数枚の板石を小口積み積み上げハの字状に開く列石が認められる。



挿図4 曲226号墳墳丘図

玄室内施設 玄室内左側には、奥壁にほぼ密着する形で1枚の扁平な板石が残存して

いる。床面にも2枚の板石が敷かれている。その他が攪乱され不明瞭であるが、板石を組み合わせた施設が置かれていたものと考えられる。

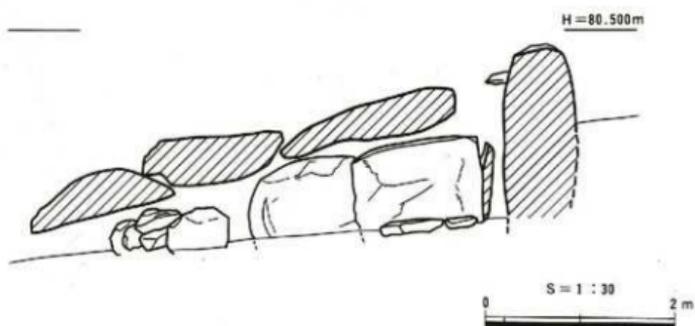
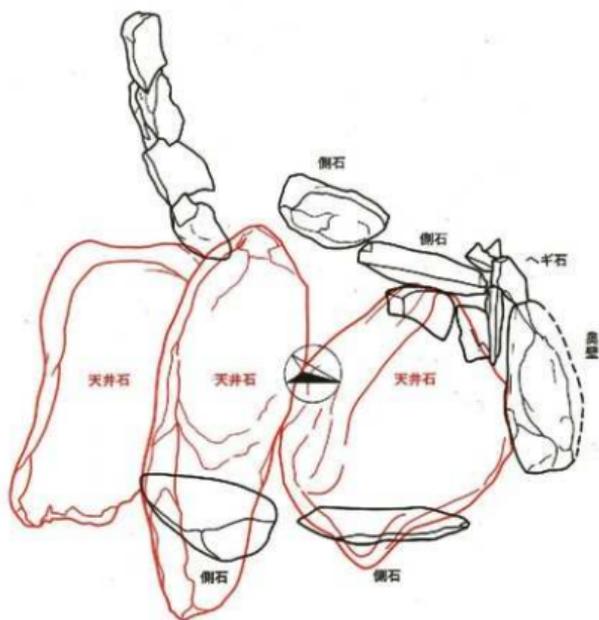
出土遺物 玄室内や羨道部周辺で須恵器が出土しているが、埋土は攪乱されており、原位置を保つものは全く認められなかった。このうち、図化できたのは須恵器杯蓋(1~4)、杯身(5~9)、短頸壺(10)、甕(11・12)の12点である。

杯蓋 1は口縁部は内湾し、端部は丸くおさめる。口縁部と天井部の境は1条の浅い沈線で区別されている。口縁部内外面は回転ナデを施すが、外面天井部は風化のため調整不明である。2は口縁部はやや外傾し、端部は丸くおさめる。口縁部と天井部の境は強めのナデにより鈍い稜を作り出している。口縁部内外面回転ナデ、外面天井部ヘラ切り後ナデを施す。3は口縁部は内湾し、端部は丸くおさめる。口縁部と天井部の境に稜はない。口縁部内外面回転ナデ、外面天井部ヘラ切り末調整。4は輪状つまみが付き、口縁端部が垂直に下方に折れ曲がる。口縁部内外面回転ナデ、外面天井部ヘラ削りを施す。

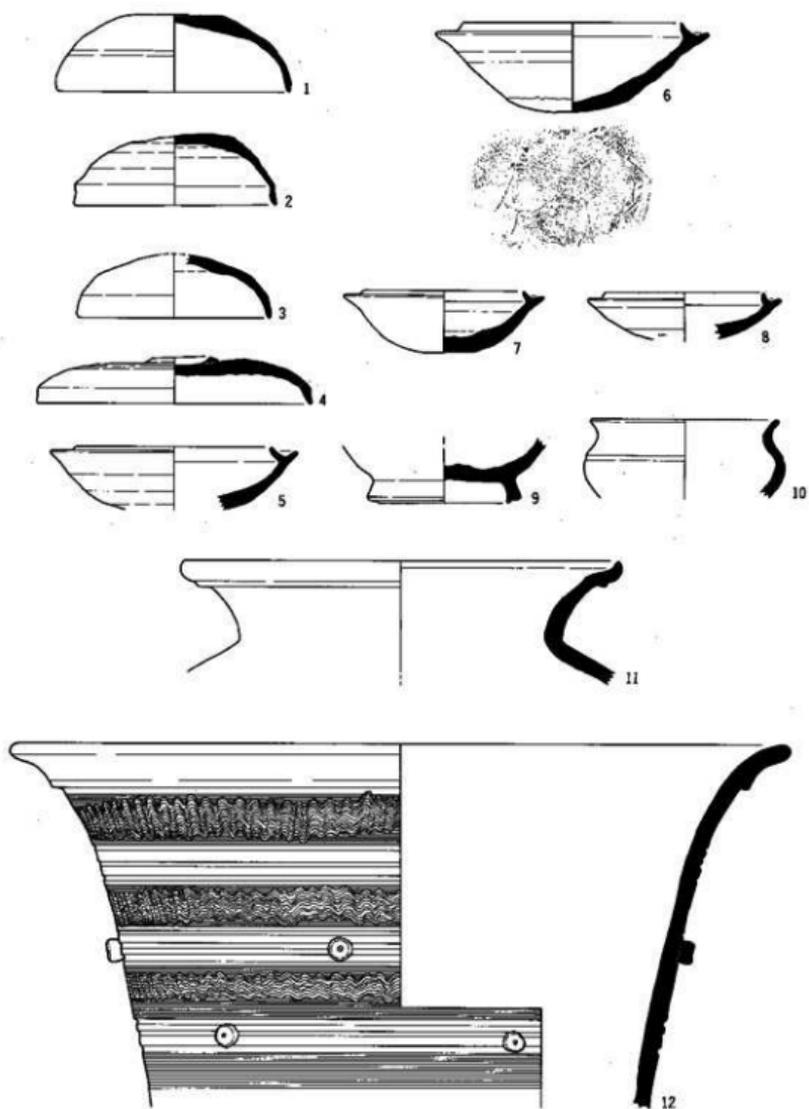
杯身 5は立ち上がりは内傾し、口縁端部は丸い。口縁部内外面回転ナデを施すが、外面底部不明瞭。6、7は立ち上がりは内傾し、口縁端部は丸い。口縁部内外面回転ナデ、外面底部ヘラ切り末調整。8は破片で、立ち上がりは内傾し、口縁端部は丸い。口縁部内外面回転ナデ、外面底部ヘラ削りを施すが中心部は欠損し不明。9は有台杯の破片で、高台は高く、外に開くが、下端は外に張り出さず内端面で接地する。

短頸壺 10は破片で、口縁部は外傾し、端部はやや尖がり気味。体部に1条の浅い沈線を施す。

甕 11は縁部の破片で、口縁端部は内湾し、その外面に若干の面をもつ、内面頸部に下同心円叩き。12は口縁部の破片で、口縁端部は複合口縁状で、外反し丸くおさめ



挿図5 主体部実測図



0 S=1:3 10cm

插图6 出土器类测图

器種	土器番号	押戻	図版	法量(cm)	形量上の特徴	手法上の特徴	胎土	焼保	成存	色	調	備考
須恵器 杯蓋	1	6	3	口径12.1	口縁部は内傾し、端部は丸くおさめらる。口縁部と天井部の境は1条の浅い沈線状凹みで区別される。	口縁部内外面回転横ナデ。外面天井部風化の為調整不明。内面天井部仕上げナデ。	密。1～3mm径の白色砂粒含む。	良		灰色		
須恵器 杯蓋	2	6	3	口径10.5	口縁部はやや外傾し、端部は丸くおさめらる。口縁部と天井部の境は強めのナデにより鋭い線を作り出す。	口縁部内外面回転横ナデ。外面天井部へラ切り後ナデ。内面天井部仕上げナデ。	密。1～3mm径の白色砂粒含む。	良	好	濃灰色		
須恵器 杯蓋	3	6	3	復口径10.0	口縁部は内傾し、端部は丸くおさめらる。口縁部と天井部の境は線がなく、不明瞭。	口縁部内外面回転横ナデ。外面天井部へラ切り未調整。内面天井部仕上げナデ。	密。1～2mm径の白色砂粒含む。	良	好	灰色		
須恵器 杯蓋	4	6	3	口径14.3	輪状つまみが付く。口縁部内側のかえりはつまみかず、口縁端部が垂直に下方に折れ曲がる。	口縁部内外面回転横ナデ。外面天井部へラ削り。	密。1～2mm径の白色砂粒含む。	良	好	黄灰色		
須恵器 杯身	5	6	3	口径10.4	立ち上がりは内傾し、受部は斜め上方に延び、端部を丸くおさめらる。	口縁部内外面回転横ナデ。	密。	良		外面 黄茶灰色 内面 黄茶色		
須恵器 杯身	6	6	3	口径11.5	完形品。立ち上がりは内傾し、受部はやや斜め上方に延び、端部を丸くおさめらる。	口縁部内外面回転横ナデ。外面底部へラ切り未調整。内面底部仕上げナデ。	密。1mm径の白色砂粒含む。	良	好	灰色		外周底部へラ記号
須恵器 杯身	7	6	3	復口径8.4	立ち上がりは短かく、内傾し、受部は水平方向に延び、端部を丸くおさめらる。	口縁部内外面回転横ナデ。外面底部へラ切り未調整。内面底部仕上げナデ。	密。1mm径の白色砂粒含む。	良	好	灰色		
須恵器 杯身	8	6	3	復口径8.4	杯身の破片。立ち上がりは短かく、内傾し、受部は水平方向に延び、端部を丸くおさめらる。	口縁部内外面回転横ナデ。外面底部へラ削り。	密。微細な白色砂粒含む。	良	好	外面 濃灰色 内・断面 灰色		
須恵器 有台杯	9	6	3	復高台径6.8	高台の破片。高台は高く、外に開くが、下端は外に張り出さず内周面に接地する。	内外面回転横ナデ。	密。微細な白色砂粒含む。	良	好	濃灰色		
須恵器 短頸壺	10	6	3	復口径9.8	口縁部～胴部破片。口縁部は外傾し、端部はやや尖がり気味。胴部に1条の浅い沈線を施す。	内外面回転横ナデ。	密。1mm径の白色砂粒含む。	良	好	灰黄色		
須恵器 壺	11	6	3	復口径22.8	口縁部破片。口縁端部は内傾し、その外面に若干の面をもつ。	口縁部内外面回転横ナデ。内面頸部以下同心円タタキ。	密。1～3mm径の長石と、微細な黒雲母を含む。	良	好	灰色		内外面灰釉
須恵器 壺	12	6	3	復口径40.5	口縁部破片。口縁端部は複合口縁状で、外反し、丸くおさめらる。口縁部から頸部にかけて波状文、3条の沈線文を交互に巡らせ、沈線文上にボタン状のつまみを貼り付ける。頸部にはカキ目を施す。	内外面回転横ナデ。	密。	良	好	淡灰色		

挿表2 出土遺物観察表

る。口縁部から頸部にかけて波状文、3条の平行沈線文を交互に巡らせ、沈線文上にボタン状のつまみを貼り付ける。頸部にはカキ目も施す。口縁部内外面回転ナド。

築造時期 出土須恵器のうち、古相を示すのは1・8で、外面調整が不明瞭なものの、陶器編年TK209~TK217形式併行期。新相は4で、MT-21型式と考えられ、古墳の築造は6世紀末~7世紀前半で、その後、7世紀末~8世紀初めまで追葬が行なわれた可能性が考えられる。

第4章 まとめ

今回調査を行った曲226号墳は曲古墳群の中でも、倉吉市との町境に近い丘陵裾部に立地する横穴式石室を主体部とする古墳であった。現況は地表に板石等の石材が散乱し、墳丘や主体部の検出は容易ではなかった。しかも、本町では横穴式石室の調査は初例であり、調査員の力量不足のため、精査が行き届かなかった所も多々ある。特に、墳丘部の調査では土層の観察力、主体部の調査では石室の築造方法、土層観察。玄門部から前庭部の精査等、課題は山積みである。しかしながら、成果があったのも事実で、当地域の横穴式石室の様相の一端を知ることができた。すなわち、石室形態、特に石室内に設置された板石を組み合わせた施設等である。この施設については様々な見解があり、「組み合わせの檜壁」、「箱式棺」、「厨子形棺様の構造」、「石碗」などが挙げられている。本古墳の場合は、同じ天神川中流域にみられる三明寺古墳がもつ、「奥壁に密着するように入口に向かって口を開いたコの字状に板石を組み合わせた施設で、床面に礫を敷いたと考えられるもの」が比較資料と言えよう。

今回の調査は前述したように、資料が余りにも断片的であり本質にせまることができなかったが、本町は県内でも有数の古墳密集地である。今後は古墳の調査を待って、今回の結果を踏まえ、さらに検討を加えたいと思う。

最後に、調査にあたって円滑な作業が実施できたのは、地元鳥地区をはじめ、発掘に参加していただいた方々、並びに整理作業に従事していただいた方々の献身的な協力と、鳥取県教育委員会文化課、鳥取県埋蔵文化財センターを始め、この調査にご協力いただいた方々のおかげであり、末筆ながらこれらの方々に感謝の意を表します。

圖 版

図版 1



調査区遠景 (西から)



調査区遠景 (西から)



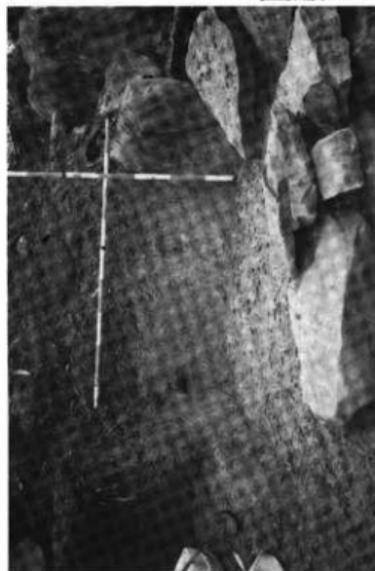
主体部 (西から)



主体部 (東から)

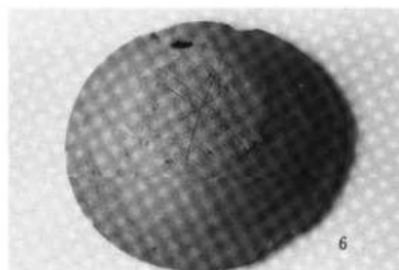
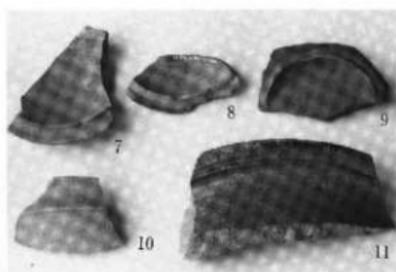
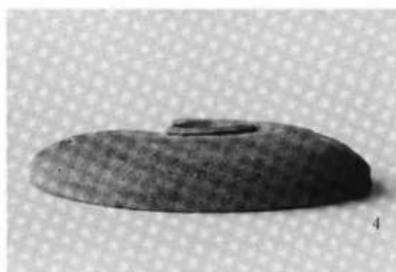
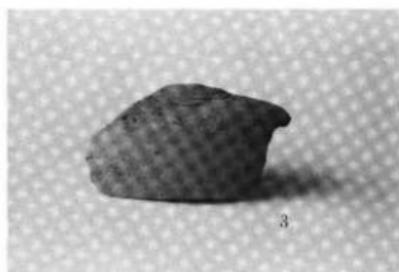
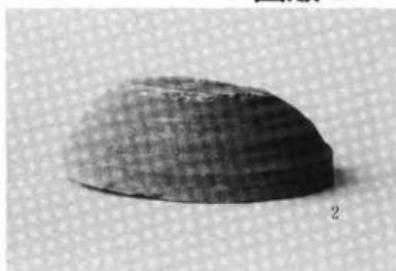


主体部土層断面 (南から)



主体部左側石側土層断面 (南から)

图版 3



平成7年3月印刷

平成7年3月発行

北条町埋蔵文化財報告書18

曲古墳群発掘調査報告書第2集

曲226号墳

編集 鳥取県東伯郡北条町土下112

発行 北条町教育委員会

印刷 勝美印刷株式会社鳥取支店

製本 鳥取県東伯郡羽合町長瀬818-1